

平成21年度第1回兵庫県スポーツ振興審議会 議事録

- 1 期日・場所 平成21年8月24日(月) 14:00～15:00
兵庫県民会館 7階「鶴」
〒650-0011 神戸市中央区下山手通4丁目16-3
- 2 出席者
(委員13名) 和田委員 小山委員 東田委員 飯田委員
平松委員 山口委員 田名網委員 平川委員
増田委員 田中委員 山中委員 大寺委員
三木委員 (欠席:寺見委員、松本委員)
- (幹事9名) *黒川幹事 大西幹事 大谷幹事 開 幹事
高見幹事 *三木幹事 濱田幹事 永井幹事
大石幹事
(欠席:藤森幹事、寺谷幹事、藤原幹事 *印は代理出席)
- (教育委員会) 大西教育長
- (事務局) 廣瀬副課長 八木副課長 野村係長
赤松主任指導主事 東指導主事 大崎指導主事
- 3 開 会 教育委員会事務局あいさつ 溝口教育次長
- 4 委員・幹事紹介 司会者(野村係長)呼名による委員紹介
及び紙面による幹事紹介
- 5 会長選出 平松委員
- 6 会長代行指名 山口委員
- 7 署名委員指名 小山委員 大寺委員
- 8 前回議事録報告 八木副課長による報告・承認
- 9 報告事項 平成21年度の事業概要について
(1) 体育保健課
(2) スポーツ振興課
(3) 障害者支援課
- 10 審議事項
(1) 兵庫県スポーツ振興基本計画(仮称)の策定に向けた取組について
(2) 兵庫県スポーツ振興基本計画(仮称)策定委員会の設置及び生涯スポーツ部会、
競技スポーツ部会、障害者スポーツ部会の設置について
(3) 今後の取組の方向性について

報告事項質疑応答

- : 今回週1回の運動実施率が59.9%に上がっている。まだ詳細な分析はこれからだと思うが、都市部の回答が多かったとか、前回と比べて運動実施率の地域性はどんな感じだったか。
- : 資料を持参していないので、後ほど調べて連絡する。
- : 校庭の芝生化が全国的に主流になってきている。淡路の特別支援学校が今年から助成を受けていると思うが、兵庫県ではどういう状況か。
- : 淡路の特別支援学校については、PTAや地域の方などが6月に取組をした。県立の特別支援学校では3校あたりで徐々に進んでいる。次に小学校、中学校、高校に広めていくには、維持管理をいかにするかということが課題として出てきている。
- : PTAの方が管理に関係されるということは、非常にいいことだ。神戸大学附属明石に幼稚園がある。そのグラウンドが長いこと芝生だが、保護者・PTAの方がいつも来て草刈りをされているので、素晴らしい状態が保たれている。来年からtotoの方で維持管理費用の助成も検討しているので、出るようになるかもしれない。
スポーツクラブ21ひょうごをサポートする全県連絡協議会を中心とした体制の中で、広域スポーツセンターが、これからポイントになると思うのだが、広域スポーツセンターの今後の見通しはどうか。
- : 県立総合体育館に置いている。広域スポーツセンターとして機能を残した形での指定管理を出して受けてもらった。今後は体育協会とも十分に話をしながら、広域スポーツセンターの機能をどう高めていくかを考えていきたい。
- : 小学校の運動プログラムのDVDができ、さらに中学校の方もできるということはとても素晴らしいことだと思う。全県的に小学校、中学校ともにプログラムを提供していく計画があるのかどうか。指定校20校のみなのか。
- : 運動プログラムについては、小学校・中学校20校づつ実践指定校にした。これまで4年、実施していて合計160の小学校を指定した。運動プログラムは全県的に実施するものであり、来年度以降も実践推進校を指定するが、全県にプログラムを発信し、小・中学校全校でやってくださいということである。今後3・4年はこの取組をしていく計画である。
- : 体力運動能力調査報告書だが、全体的にかなり悪いとあったが、功を奏して結構良くなっていると思う。例えば7ページに新体力テスト結果の握力だが、平成15年に落ち込んでいるが、ここではどのようなことがあったのかなど、現状分析の所で原因を解析できていればお聞かせいただきたい。解析することで、今後有効な取組の参考となる。

- ： 平成15年は特化しているが、原因は調べていない。相対的な傾向として兵庫県は握力が弱い。原因は、交通の便がよくなった・室内ゲームの遊びが多くなった・塾などで遊ぶ時間が減った。また、やる子とやらない子の2極化が進んでいる。先日の全国の調査でも、中学3年生の女子がほとんど運動をしてないという結果があり、1週間に30分以内が30%という資料もあった。現状をとらえて、今度作るプログラムには、楽しく運動しながら体力を高めるプログラムを作る。

審議事項説明

永井スポーツ振興課長

兵庫県では、平成20年2月に作成した兵庫県スポーツ振興行動プログラムに則り、全庁的なスポーツ振興プログラムを進めている。この行動プログラムの上位計画にあたる兵庫県生涯スポーツ振興計画「ルネッサンスプラン」があるが、この計画が平成22年度末で終了となる。そのため今後は行動プログラムで取り入れた「生涯スポーツ」「競技スポーツ」「障害者スポーツ」の3本柱を基本とした、次の兵庫県スポーツ振興基本計画（仮称）を作成することが必要となっている。前回の審議会では、新しい兵庫県スポーツ振興基本計画策定に向けての策定委員会、専門部会の設置等について了解を得た。今回は、具体的なメンバー構成・計画の策定に向け、どのような点に留意していくかなどを交えながら、皆様のご意見をいただきたい。

審議資料説明

八木スポーツ振興課副課長

< 省 略 >

審 議

- ： 今の事務局の説明に関しまして、何か質問はありますか。

< な し >

- ： それでは、案どおりに進めさせていただいてもよろしいか。

< 異議なし >

- ： 新しく策定委員に就任された平川委員と増田委員から、専門分野の取組状況の報告と、次期計画への意見をお願いしたい。
- ： 7、8年前、県から兵庫の子どもたちの体力が全国的にみて低い原因の分析について依頼があった。結論としては、まだ原因を特定できていない。分析の結果、兵庫の子どもたちの体力は、報告書のとおり、小学生は全国平均より劣り、中学生でだんだんと全国水準となり、高校生で少し上回るような状況が長年続いた。小学校は低いけど中学・高校でほぼ戻っているのであまり心配していなかったが、最近は小学生は徐々に上がりつつあるが、中学生が低くなり、高校生は全国水準という傾向である。測定項目でいえば握力・反復横跳びが低く、動作の発揮能力で、筋と神経のレベルが劣っているのではな

いかと分析している。

その一番の原因は、身体活動の絶対量が少ないからである。運動量の週の実施頻度・実施時間と体力水準の関係をみると、身体活動量と体力水準は明らかに負の相互関係がみられる。また、食事・栄養など生活習慣も影響しているのではないかというような分析をしている。

これらの結果を踏まえ、兵庫キッズ元気アップ運動プログラムを作成し、縄跳びと走跳投の運動を含めた運動プログラムを、県内全教育行政地区の指定校（約30校）で実施した。その結果、順調には良くなってきたと思うが、依然全国レベルには達していない。今年度は、子どもの体力・運動能力を高めるプログラムを作成し、DVDの形で全県に配布できる体制を取りたい。

活発な身体運動をより楽しく、より興味を持ってもらうには、小学生の子どもには体力づくりというよりは、動きづくりという形で進めるのが発育発達に合っていると思う。また、運動の安全と効果の視点から体を支持する能力や股関節を強くすることも必要ではないか。中学生の時は、この時期の身体活動は「からだをつくる」大切な刺激となるので、体力づくりということばでよいのではないか。小・中学生通しての目標としては、毎日15分以上の活発な運動を、学校生活の中で取り入れればよいと考える。

これからの子どもの身体活動量のスタダードは、1日1時間、毎日活発な身体活動となるであろう。そのうちの15分間は学校が保証したい。

県教育委員会・県体育協会・兵庫体育スポーツ科学学会で「ひょうごジュニアスポーツアカデミー」を先月からスタートさせている。将来、兵庫で競技力の高いレベルの子が育てばいいと考えている。また、その過程において様々な指導法が研究され、その内容を初心者にもフィードバックされ、子どもの運動能力発達に寄与できる充実したものにしたい。

中高齢者においても身体活動量の減少が指摘されており、運動やスポーツだけでは身体活動量を満たされない状況になりつつある。日常の活動量ももっと考えないといけない。簡単に言えば、1日の歩行の時間をどれだけ増やせるかということになる。スポーツ振興審議会としても、スポーツをどう捉えるか、身体活動・日常活動をどう捉えるか、これから検討を加える必要がある。

- ： 障害というと身体障害、知的障害、精神障害 の3つに区分されるが、今までの歴史の中では、身体障害が中心で、知的・精神障害の方は遅れているのが現実である。また、障害者スポーツというと、違ったスポーツをしている人間という意味合いが多分にある。このため我々は障害者スポーツという言葉は使わなくて、障害者のスポーツと呼んでいる。障害者のスポーツは、特別なスポーツをしているわけではなく、ちょっとルールを変えたり、用器具を変えることだけであり、障害者のスポーツも一般のスポーツも同じである。

障害者は、健康問題や金銭的な問題もあり、スポーツに参加できにくいという現実がある。兵庫県では、一部のスポーツは普及・発展はしているが、まだまだ地域に根ざした活動には至っていない。何らかの形で一般スポーツと、どう接点を持って行くかが課題だ。障害者の優先スポーツ施設が県内には約10施設あるが、それらの施設と連携をとり会議を持ったりしている。県立の施設はまだいいが、市立になると市民の利用は受け入れるが、他市から

の利用は受け入れないという施設があり、障害者のスポーツの振興の障壁になっているのではないかと強く感じる。

兵庫県は、シドニー・アトランタの時、東京に次いで2番目の選手を輩出している。また、兵庫県では、全国で5番目に入るくらい多くの全国大会が行われている。兵庫県には、障害者のスポーツが普及・発展する土壌がある。

兵庫県ではないが、指定管理を受けることによって、障害者のスポーツ教室が無くなったり、スタッフが少なくなっているところがあり、障害者のスポーツのクラブが消えていくということが全国で起きている。単に経営という視点で指定管理を選択するのではなく、障害者のスポーツをどうとらえるかを指定管理の中にも入れていかなければならない。

一般スポーツの中でも、バスケ・水泳・陸上・卓球・アーチェリーなどは、一般の競技団体の中で障害者が活動している事例もある。まだまだ未成熟なので、これからは人材育成が大きな鍵を握るのではないかと考えている。

8月30日には、県や神戸市を含め、「障害者スポーツネット兵庫」を立ち上げる。大学・企業・障害者の団体、そして民間の方たちの中で、障害者のスポーツを支援する。

障害者のスポーツも大会参加だけでなく、日常生活の中でどれだけ運動を実施しているかを一般と同じようなスケールで調査をしなければいけない。情報においても、少ない情報をどう加工して、県民の方々に配信できるのが、今後の障害者のスポーツの大きなテーマかと思う。

- : 次期計画への盛り込みたい内容等、皆さんの意見を伺いたい。
- : 子どもたちの生活習慣で「早寝・早起き・朝ご飯」は、一番大事な部分なので、スポーツを考えると一番基本になると思う。子どもたちに体力がないのは、トレーニングもあるが、食事をきちんと取らないことにも原因があることが浸透していない気がする。栄養教諭の方々とも手を携えていけば効果はあると思う。

1単位を1週で、小・中・高校生も、健康のための1クレジットを1単位として学校教育の中に組み込んでいくのは考え方としてあるのではないか。他国ではそういう取組をしようかという話もある。
- : 中学生の生活スタイルを見ていて2極化の傾向が非常に強い。「私はスポーツを見る人」「僕はスポーツをする人」と自分で自分のスタイルを決めてしまいがちな生活を送っている子どもたちが多いような気がする。

一時期「楽しい体育」という言葉が出てきて、楽しかったらそれで良い、もっと高いレベルを目指した指導があるべきなのに、安易な楽しさだけを求めた体育指導で終わっていることがある。新しい学習指導要領の中で、つけるべき力は何なのか、指導者がきちんととらえながら日々の体育指導に関わっていく事が大切だと思う。

学校体育でのスポーツ活動ですが、限られた施設、限られた時間の中でどう計画的に行っていくか、市町村の教育委員会の指導も必要になると思う。
- : 3月に新しく改訂された学習指導要領の中で、部活動が学校教育部活動の一環として、教育課程との関連が図られるようにという文言が入っている。

部活動は教育的な意義が入ってくるので競技スポーツと関係をきっちり整理してから進めなければいけない。

以前から部活動に関して、高齢化とか専門的な指導が出来る先生が少ないなどの問題が出ていたが、教員採用において、特に小学校・中学校体育以外の先生方で、部活動の指導の出来る先生、専門的な指導が出来なくてもスポーツをしている子どもたちを見るのが好きだという先生方を、積極的に採用できるようになればよい。

高等学校の運動部の生徒と、学校の近くのスポーツクラブ21の小学生のクラブで、夏休みに定期的に高校生が指導していたり、大会の前に小学生が体育館にきて、高校生が指導するようなことが、わりあい行われているのではないか。高等学校の生徒も、高校生は指導の仕方を工夫しながら基本的な技術指導をする中で高校生も向上していく。高校生のプレーを小学生が見ると、本当にすごいプレーを見せてくれると、子どもたちもスポーツをしてみようと思うきっかけとなる。

： 国体での結果を出すためにブロック予選を通過しなければならないが、選手の層が安定しない。兵庫国体に向け、10年計画で選手を育て上げたことは、素晴らしいアイデアだったと思う。

ジュニアスポーツアカデミーの中で、能力の高い子どもたちがピックアップされて、そこから自分にあった競技を見つけてあがってくればいいのだが、もっと早い時期からトータル的に優秀な子どもたちを見つけて、タレント発掘を積極的に行うべきだ。そして、コーチをサポートする組織も必要だと思う。また、シニアや高校生、他県・他市・他クラブとの積極的な交流を持つことが大切である。指導者と子どもたちの環境を質の高いものにしていき、よき指導者をよき環境の中で、経済的なことも含めて育てあげていくことも必要ではないか。

： 今回の資料を見て、またジュニアスポーツの関わりでいつも思うのは、生涯スポーツ部門と競技スポーツ部門を明確に分けるのはいったい何なのか。これは効率が悪いことであって、指導者の事を考えると本当は繋がっていないといけないはずである。即、競技スポーツに入る子どもはいないだろうし、何かスポーツに親しむという形で入ったのが、そのスポーツが上手くなり将来に繋がるということもある。生涯スポーツ部門と競技スポーツ部門の指導者・指導方法が有機的に繋がっていることは大事な視点だと思う。生涯スポーツと競技スポーツの分け目は何なのか。障害者のスポーツも含めて、それぞれの部門がオーバーラップするような視点が必要だと思う。

： 市町で色々なイベントを考えて提供しても、なかなか選手・チームが集まってこないという現状が出てきている。その反面、スポーツクラブを通して指導者に恵まれた中で運動している所は活発にしている。興味関心を持つ、何かしてみたいと思わせるようなアイデアを発揮して、活動する場を提供する。私たち体育指導委員としては、色々な住民のニーズに適応したイベントや活動を提供していく。様々なニーズに合ったアイデアを提供できるかだと考える。

: 競技スポーツ、生涯スポーツ、障害者スポーツと垣根があることに問題がある。部会としてこのチャート図のように分かれて話し合うのは良いが、イベントなどは合わせるべきだと思う。その方が集客力があるからだ。

今注目しているのは障害者のサッカーで、兵庫県が日本で一番進んでいる。障害者の参加でもカテゴリーが縦割りがあって、知的障害、視覚障害、聴覚障害、脳性マヒ、電動車いすの5種類がある。これだけの人がそれぞれに動いていてもダメだということで、障害者参加型の交流プロジェクトが生まれた。これは、兵庫県・神戸市など自治体が、それなりの施策をしている結果だと思う。こういう委員会などロングスパンで考えることと、すぐに助成するなどのショートディスタンスでの対策が急がれると思う。兵庫県サッカー協会も入って、既存の団体がスクラムを組んで行こうとしている。イベントの中で障害者のサッカーがデモンストレーションすると、非常に目に付きやすい。まず理解して貰うことが大事だと思う。

オリンピック競技者の1割は兵庫県出身。パラリンピックも同じ。日本でトップクラス。兵庫県は、やるべき事はやっていると思う。

: イベントでは、今、県と考えているのがフルマラソン。街おこしの一環としても考えていけないといけないと考えている。

スポーツクラブは、166の小校区全てにクラブができ、4万4千人が参加をしているが、それをいかに広げていくか課題である。県の助成が無くなった段階で、いかに自立したかたちになっていくのか、そしてクラブ同士がどう広がっていくのかというところを見極め、必要な手立てを打っていかなくてはいけない。

健康の観点からは、震災以降、アスリートタウン構想を提唱し、それに基づいてやっている中で、スポーツを楽しむ街づくり、健康づくりを行っている。誰もがスポーツをする、例えば、保護者が子どもを連れ出すことによって子どもがスポーツに親しみ、保護者の健康にもいいといったようなきっかけづくりができることによって、裾野が広がり健康づくりに繋がっていかないかというような取組が必要ではないか考える。

: 世の中が多様化していく中で、人としての生き方や生活の仕方が、スポーツの持つ価値とが、どういう結び方をするのかということ、県民・地域・学校がしっかり押さえていくことが大切である。握力を測定することが、どうして生き方に繋がっていくのかを考える。そこが寸断されているので、結びつけていかなければならない。トップを輩出することも、全体としてレベルを上げていくことも、その繋がりをつけることで解決できると思う。

: 余裕がない・遊びがないのが今の社会ではないか。私たちの時代は缶蹴りや縄跳び、ゴム跳びなど、遊びながら体力を養ってきた。それが今は他のものに取られて遊ぶことが無くなってきている。それを何かの枠にはめて、スポーツと言ってもなかなか難しいと思う。もう少し自然な流れで、遊び・余裕の中から体力を養えるものがないか。組織でやると全部縦割りになる。そうではなく、生涯スポーツの流れの中から、祖父・祖母・父などと一緒に子どもがスポーツをしていく。その中で色々なものを、見ながら教えられなが

ら成長していくこともあるのではないか。子どもと一緒に遊んでやるというところから、スタートしていかないとなかなか体力は養われないのではないか。

<全体を通して>

: 委員の皆さんの意見を伺い、4点の課題が出てきた。

1つ目は、スポーツは色々と変わってきて、スポーツとは何かと再検討しないといけない時期にきたのではないか。運動・スポーツ・健康づくり・身体活動等あるが、例えばジュニアスポーツでタレント発掘をしているが、いきなり競技スポーツする人はいないと思うので、そこで生涯スポーツか競技スポーツかという区別はナンセンスである。また、健康づくりは運動だけではなく、日常的な身体活動量を増やしていかないといけない。こういうことから考えると、単に競技スポーツとかそういうことではなく、もっと広げてスポーツを考えていかないといけない。

2つ目は、中・高体連の方が言われたように、部活動と「スポーツクラブ21ひょうご」との関連である。今までは、あいまいにされてきたが、国のスポーツ振興基本計画でも、競技力の向上で一貫指導を打ち出しているが、「スポーツクラブ21ひょうご」は中学、高校の会員が減ってくる。愛知県では、総合型クラブでクラブの名前で活動しているが、クラブの名前では中体連の試合に出られないという政策矛盾が出てきている。高校の部活が地域のクラブと連携しているとか、もっと素晴らしいものができるよう考えていく必要がある。

3つ目は、数値目標の尺度を考えないといけない。これからのスポーツ振興を考えると、週1回の運動で良いのかと、改めて考え直したい。ヨーロッパがしているのは、ACSMといって、アメリカスポーツ医学界の指針をベースに、1回30分以上、やや強い運動で週3日、適度な運動で週5日ということで広めている。週1回以上でなく、もう少し尺度を新たに考えていく必要があると思っている。

4つ目は、スポーツ振興法によって、こういう審議会は法的な基盤があるが、1961年に出来たスポーツ振興法が、50年近く経っている。これから新しいスポーツ基本法が形として出てくると予測される。そのスポーツ基本法がどのようになっていくのか、動向も見ながら、新しい国のプランが来年できる。そういう動向も見ながら新しい計画を作っていく必要があると思う。

: 皆様からお出しいただいた意見を、山口委員が4点にまとめて、今後こういう方向にとご指摘いただいた。皆様からいただいた意見を、事務局で整理して、次回の審議会にまとめて出していただきたい。

署名委員

氏名 _____ 印 _____ 氏名 _____ 印 _____